

## 〔Ⅳ〕部活動について

徳 井 輝 雄

### (1) 本校部活動の状況

昭和47年までは全員参加制であった。部活動（当時はクラブ活動と称していた）を活発にする意図で行われていた定期交歓試合（金大付高戦）がこの年までつづいておりかなり活発な時期であった。

昭和48年にこの定期交歓試合が中止となりそのうえ必修クラブの導入が行われた。それにもない部活動は自由参加となり年年衰退化の傾向を深めていった。

昭和51年の春、部衰退化がはっきりしてきたことにより教師間に部活動をめぐるじゅじゅの論議が出はじめた。それは大別して部の顧問を引受けるのを義務制にするか否かといった管理上の問題と部活動の教育的意義に関するものであった。こうした中で、生徒にもこの問題を考えさせるべきだとして生徒会への働きかけを行った。その結果は以下に述べていくようなものであるが、結論を先に述べれば、或る程度の効果を示し、部活動に対する生徒の新しい動きが出はじめ、ある意味では新しい部活動の幕明けを感じさせるものがあると思われる。また部活動活発化という目的をもって生徒会活動が展開されようとしており、ともすると一般生徒から浮き上がりがちな執行部の活動も、一般生徒の要求に密着したものになっていく様相を示している。

従来の部への参加率及び新しい約束の下に部が成立をした52年度の状況については資料1と3を参照されたい。

### (2) 部活動問題をめぐる本校高校生徒会の働き—とくに昭和51年度について—

生徒会執行部が一般生徒にアンケート調査をしてその活動方針を定めていく方式が定着しはじめた昭和51年度前期執行部において、最初に部活動問題がとり上げられた。この時点での一般生徒の部への関心はかなり高く、部の衰退化問題に対してなんらかの手をうつべきだと74%の者が考えていた。しかしそのうちの52%の者が、まず個々の部で努力して改善策を見つけるべきだとしていたため、生徒会執行部がこれに直接乗り出すことはなかった。

ところが51年度後期になって51年度生徒会会計の決算報告及び52年度生徒会予算案を作る時期になり、部の衰退ぶりを問題にせざるを得なくなった。すなわち

休部状態の部が3分の1を占め、活発な活動をしている部がわずか2～3部となっているような状態では、予算案を従来どおり作れないということであつた。

生徒部はこの状態を考慮に入れて、生徒会執行部に対して、来年度（52年度）予算は来年度に部の状態ははっきりしてから立てることを提案した。この提案を生徒に押しつけるのではなく執行部及び生徒協議会さらには部の代表者等と十分討議するよう指導し彼等が事態を十分認識しその対策を立てるようにした。この提案を受けて生徒側は、生徒会執行部を中心に、生徒協議会、部長会議等種々の論議を行った。執行部はこの問題をめぐって、教師と部の代表者との座談会を催したり、しゅじゅのアンケート調査を行って、一般生徒の関心を高めていった。これらの活動の総括として、執行部は資料2に示すような部活動立て直し策を含んだ予算編成方針案を作り上げ、これを生徒協議会は修正可決した。これは予算措置を通じて部活動を活発化しようとしたものである。

このように部の予算をめぐる論議は真剣に行われ、部とは何か、ひいては高校生活とは何かといった根本的問題についてかなりの者が考えざるを得なくなり、自己の学校生活を反省してみるきっかけとなったようである。52年度の春は、資料3にみられるように部・サークルの状況に新しい傾向がみられ今までにない性質の集団があらわれてきた。また部活動が学校生活を充実させる具体的活動であるという論議があり、三無主義ではいけないという反省がされたせいか、例年になく受験を控えた三年生の部や生徒会活動への参加が多くなっている。

### (3) 部活動の問題点

#### 3-1) 生徒にとって部とは何か

昭和47年11月及び昭和52年2月に行われたアンケート調査の結果をもとにして部活動をめぐる生徒の意識をみていく。資料4、資料5参照

生徒にとって理想的な部とは、集団行動に慣れ精神と身体を鍛える場となりうるものと考えている者と、先輩・後輩等広い交流ができて同じ趣味の者同志が楽しくやっていく場と考えている者にと大別できる。そして後者の考えに立つ者がかなり多い。部に入って活動する目的は、充実した生活ができるし、技能の向上

や広い交友深い友情が結べるからだとしている。他方部に入らない者の理由はどうか、それは入部すべき理想に近い価値ある部がないからであり、自分の趣味にあう部がないからであり、少しは勉強が心配であるからだ。この勉強に関して、高校生では部に入っているから勉強できないというのは、勉強しないことの言訳にすぎないと自分ではわかっている者が多いが、中学生では、親が勉強との不両立を唱えて親の意向で部をやめさせられる場合がある。では部に入ってはみたが、その部をやめたく思うのはどういう時か。活動がダラダラとして意味がなく時間のムダだと感ずる時や、勉強が遅れるのではないかと感じたり親から言われた時である。またよい指導者（顧問やコーチ）がいないというのもやめたくなる動機になっている。

以上をまとめてみると、生徒にとって部とは、充実した生活を送る具体的場面ではあるが、その部の活動が有能なリーダーや顧問がいないためにうまくいかず

だんだん魅力がうすれていくものになっている。

### 3-2) 教師にとって部とは何か

部活動に対する教師の認識は互いに矛盾する諸側面からなっている。一つの側面は、部活動は教科指導では得られない教育的価値を認めているということである。教科活動と生活指導の接点として、部活動や生徒会活動が考えられるのは全く意義深いことである。ところが他方では、労働条件や施設・設備によっては大いに奨励もできないのが現状である。教科指導中心の現教育体制下ではさまざまな制約があり、部の指導はやっかいな存在となっている。とくにスポーツ系ではケガによる刑事・民事の責任問題もすっきりしておらず余計問題を複雑にしている。従来からこのような矛盾は存在していたが他の面からこれは或る程度克服されてきた。他の面とは、部活動に対する教師と生徒の情熱である。生徒の情熱が教師をつき動かし、教師の情熱が生徒の自主的活動を生んでいった。しかし現在

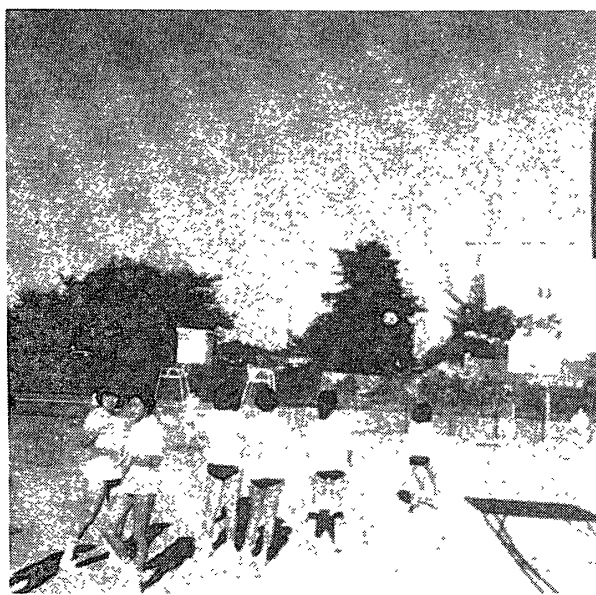


写真 昭和52年4月頃の「部」練習風景  
(中学女子バスケットボール部)

は相互にこの情熱が冷えてしまっているといえる。なぜ冷えたか。部活動に対する教師のイメージがそんなに変わっていないのに生徒の部に対する意識がかわっていったことに原因があるようだ。そして教師の側がその変化に対応できず、部に対して積極的になれずそれがまた生徒に反映してますます教師と生徒の喰い違いが大きくなっていったように思われる。先にも述べたように、われわれ教師が部を考える時、教育的に意義のある活動が展開されることが大前提となっている。そして大部分の教師が、部活動とは少々苦しくともがまんして練習に励み一定の成果を挙げるよう生徒が自

主的に活動していくものとしてみておりそこに教育的意義を感じ情熱を燃やしていく。ところが、多数の生徒は、部とは楽しくのんびりとやるものだ、なにも苦しむことはないというふうな考えは始めている状況の中であって、この教育的意義は失なわれているように感じられるのである。たとえば体育系部では、計画に実行力がなく、責任感・協力的態度の欠如、苦しさを避け練習はいやがるが試合には出たがり下級生の面倒をみないといったようなことが言われてくる。さらに試合を目的としないなかよしグループ的な部があらわれてくる中で「遊び」に教師は付き合う必要はないと

いう見解が生れる土壌が生じている。さらに真の意味での自主性が育っていないことがあげられる。部活動は本来生徒の自主的活動であるが、自分達の中から指導者を作り出せないままでは教師に頼ってしまう。ところが教師の部に対するイメージと自分達のイメージが喰い違ふ為教師についていけなくなる。

教師の側にも問題はない訳ではない。イメージの喰い違いを固定的にとらえ指導を放棄してしまう。またわれわれはともすると技術至上主義になってしまう。技術指導を通じての生活指導が本来の姿ではあるが、われわれはみんなが十分な技術をもっていないため十分な技術指導ができず、したがって部運営の指導の方もやりにくくなり、ついに放棄してしまう。

### 3-3) 部活動指導上の足がかり

生徒会執行部が行った座談会やさきに挙げた資料2～5などを総合して一度生徒の部に対するイメージを作り上げてみる。生徒が自ら挙げている部衰退化の原因は、① 練習方法がうまくいかず練習がダラダラする。② 練習そのものを強制されないとできない。③ 技術的指導の不足。④ 勉強が心配になってくる。このような自己反省と、さきにみた彼等自身の部に対するイメージとを比較してみると、彼等生徒の意識の中に次のような矛盾をみつけだすことができる。

1. 練習しなくてはならないが苦しい練習は避けたい。
2. 先輩にめんどろをみてもらいたいが、後輩のめんどろはみたくない。
3. 自主的な活動をしたいが、強制されないとできない。
4. 先生には毎日出てきてもらいたいが、毎日練習するのはいやだ。
5. 封建的部運営はいやだが民主的運営ではうまくやれない。

部活動のみならず生徒指導のポイントはまさにこの矛盾をどううまく発展的に処理していくかにかかっている。まずわれわれは、生徒自身がこのような矛盾に気付くようにしむけなくてはならない。生徒会執行部が座談会やアンケートを実施していったことは、この点で意義深いものがあった。

### (4) 今後への展望

前述の矛盾に気付いた一部の生徒達には二つの動きがみられる。一つは教師が考えている本来の部の姿に戻り練習などを一生懸命やろうとする動き。もう一つは新しい性格のサークル活動をしようとする動きである。即ち本来部活動は楽しく趣味的な活動である。試合や校外出場など考えずにやっつけていこうというものである。一旦出てきて消えてしまった「週一回テニスサークル」

などはその代表例である。また一人の生徒がきびしい部と楽しいサークルとの両方に顔を出しているのも彼等なりの矛盾の解決策である。

このように生徒の多層化や一人の生徒の意識や好みの多様化が部活動へのイメージの多様化を生みさらに部やサークルの具体例の多様化を生み出してきている。われわれ教師は、新しい教科外活動のあり方を求める中で、新しい部活動時代の幕明けをむかえつつあるといえる。これに対応して教師の中にも部活動が趣味的なものでよく何も「鍛錬」といった目的に固執する必要はないといった考えが出てきている。この新しい幕明けにどう対処するか実践を通じて考えていかねばならない。一つの対応は生徒会で部活動について真剣に考え、いろいろな部活動を活発にしていくことである。また部活動が立派になれば生徒会活動も盛んになっていく、51年前期において野球部が東海大会に出場した時47年以後なくなっていた応援団を生徒会執行部が中心となって急造したのもその例である。

今後とも生徒の部に対する意識の中にある矛盾や生徒と教師との間の矛盾を少しずつ解決していくことが残されている。

#### <資料1> 部活動への参加率(4月当初)

	中学	高校
48年以前	100%	100%(全員参加制)
48年度	87%	78%(自由参加制となる)
49年度	77%	71%
50年度	78%	69%
51年度	57%	50%
52年度	76.5%	52%(生徒会テコ入れはじめる)

#### <資料2> 51年度後期執行部が生徒協議会に提出し修正可決された予算編成方針案

- ① 現在存在する部をすべて昭和52年3月9日よりなくなったものとする。
- ② その時点が、サークル活動のはじまりとなる。(サークルも顧問が必要)
- ③ サークル時の活動が、部成立の鍵になる。全サークルは、活動日には活動日誌(出席・活動内容)をつけ一週間毎に顧問に確認の印をもらい運動系サークルは体育委員会に、文化系サークルは文化委員会に提出(4月23日以降は2週間毎に継続する)
- ④ 上の活動状況と人数が部の成立条件を満たし、正規の顧問の承諾があればサークルは部になることができる。(正規の顧問とは、部としての顧問のこと)
- ⑤ 昭和52年4月23日までに部として成立したものを対象に5月に予算を決定する。
- ⑥ 4月23日以降に部となったサークルについては、

5月決め予算の対象にはならない。ただし活動状況によっては補正予算を組む。

- ⑦ 存在する部は、活動日誌を毎日つけ、2週間毎に提出し、それは常に部の成立条件を満たしてはならず、この条件を満たさなくなった部は、予算を凍結し、サークル化する。

成立条件

- ① 運動系10人以上の部員。  
文化系5人以上の部員。  
② 活動日数は週に3日以上。  
③ 活動日の出席人数、活動内容等を活動日誌を毎日つけて報告する。

<資料3> 昭和52年度の新・サークル(高校)

部・サークル名	人数	高3人数
1 柔道部	14	(8)
2 野球部	18	(0)
3 テニス部	39	(1)
4 バドミントン部	21	(3)
5 バレー部(女子)	12	(0)
6 バレー部(男子)	17	(9)
7 バスケット部(男子)	11	(1)
8 バスケット部(女子)	10	(1)
9 卓球部	15	(0)
10 フラスバンド部	8	(3)
11 美術部	11	(0)
12 演劇部	17	(6)
13 茶道部	18	(5)
14 マンガ研究サークル	14	(0)
15 軽音楽サークル	10	(0)
16 コーラスサークル	7	(0)
17 女子ソフトボールサークル	6	(5)
18 サッカー部	18	(0)

<資料4> 48年当時の部活動に対する生徒の意識

1. 部活動に満足しない理由

	高校	中学
イ. 設備備品の不足	19.4%	26.6%
ロ. 練習方法や内容に不満	21.4%	32.4%
ハ. 技術的指導の不足	17%	36.8%

2. 部活動に対する意義をどこに認めるか。

- イ. 先輩、後輩などの友人関係を深めることができる。  
ロ. 好きなことを同好の者が集ってすることが楽しい。  
ハ. 連帯感を得ることができる。  
ニ. 心身を鍛えることができる。  
ホ. 息抜きなど、授業では得られないものがある。

3. 理想的な部とは

- イ. 強制加入でなく、先輩や先生の圧迫のない自由で自主的なもの。  
ロ. ほんとうにやりたい者のみが行う部。  
ハ. 技術的指導者がいること。  
ニ. 設備・用具が整っていること。

<資料5> 部活動に対する生徒会執行部のアンケート結果より主なものを挙げる。(52年2月実施)

1. 部をつづける理由

- イ. 充実した生活が送れる。 13%  
ロ. 技能の向上。 11.5%  
ハ. 先輩・後輩の交友や連帯感が持てる。 8.5%

2. 部をやめたい理由。

- イ. 練習がだらだらしていて意味がなく時間の無駄。 8%  
ロ. 勉強が遅れる 3.5%  
ハ. 先生が練習をみてくれない。 3.5%

3. 理想的な部とは。

- イ. 集団行動に慣れ、精神身体を鍛える場となるような部。 40.5%  
ロ. 広い交流が得られる。 39.5%  
ハ. 同じ趣味の者同志が集まりのんびり楽しくやっていたりするような部。 26%

## [V] 学校行事のあり方・問題点

鈴木 洋一郎

学校行事には、儀式・代育大会・文化祭などのような校内行事と林間学校・遠足・修学(研究)旅行のような校外行事とがあり、行事の性格、運営の上から学校主導型のもの、生徒主導型のものに分けられる。しかし多くの行事が、学校側の一方的指導で運ぶもので

なく、行事に参加する生徒と十分に話し合いを重ねてなされるべきである。校内における文化祭や五月の高校の球技大会などは、生徒会が主導の行事で教育的成果のあったことは、紀要にも既に述べてきたところである。